
秘密の花園～美晴ヶ峰のお嬢様シリーズ島津涼子～

かとう みき

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

秘密の花園〜美晴ヶ峰のお嬢様シリーズ島津涼子〜

【Nコード】

N5074BA

【作者名】

かとう みき

【あらすじ】

女子校は花園ではない。

雑草の様に強くなければ、お嬢様もやっていけない。

司書室に籠るのは司書では無く読書好きの一生徒。

彼女は恋愛相談室と呼ばれて、一部の信者に拜まれていたが、失恋してヤケで婚約する様な女だった。

実は相談に来るのは変態に悩む女性ばかりだった。

実は凄く平凡な半引きこもり少女だが、買い被^レられてばかり。

百合は一切有りません。

サイドストーリーからUPしたり変な進め方してます。文章も暫くは大雑把かもです。サイドは色々ですが、本編は高等部の3年生からです。

チマチマと書きます。涼子のある程度書かないと弥也子が進まなくなってしまうのです（・・・；）

資料館の主 失恋と理解者 1

特に約束がある訳ではない。

しかし彼女は常にそこに居るから、気紛れに訪ねても問題は無かった。

問題が有るとするなら、ある種の来客がある時だが、その時には司書室を訪ねない分別が弥也子にはある。

お客様がいらっしゃるようなら読書でもしようかしら。

そんな事を思いつつ、少女は資料館に足を向けた。

天気が良いからと丘に登る事が許されるのは、弥也子の成績と素行に問題が無いからだ。

授業をサボるのは素行に問題が無いのかと、ヶ峰に馴染まない者は不思議に感じるだろう。問題は無い。怠業では無く、単なる選択でしか無いからだ。

ヶ峰では成績が学年で30位内ならば出欠が自由になる。素行に問題があれば取り消される事もあると話だが、そんな問題を起こした生徒は未だ曾て居ない。

その点では、兄弟校の春ヶ峰に共通し、風ヶ泉とは一線を画する。名門と呼ばれ乍ら、三校の内では風泉のみが奔放な校風で唯一の共学でもある。良家の子女を通わせるには躊躇する学園だった。

弥也子はこの学園では紛う方なき優等生で、常にトップの成績を保った。中等部からは風紀的にヶ峰を選択し進学したが、此処でも当然の如く優等生でトップを保ち続けた。

海島省悟などのライバルが不在なだけ、此方の学園でトップを取る方が楽でもあった。

弥也子自身は、当たり前前にノンビリと過ごしている積もりでさえある。

時に自宅で自己学習をし、時に所属するクラスの授業に出席し、時に資料館の主と呼ばれる少女に会いに行く。

そこに同行者があるのも、珍しい事では無かった。ただ、一人の友人に限って……ではあったが。

「弥也子さま。」

声で誰かは知れる。呼び掛ける声に弥也子が振り返れば、幼馴染みの少女だった。

弥也子を見つければ、いつも嬉しそうに笑う少女である。

そんな相手は珍しくも無いが、彼女は弥也子が珍しく自分から構う少女でもあった。

それはこれから向かう資料館に居る少女にも云える事だった。

「ご機嫌よう、恵美さま。」

「ご機嫌よう、弥也子さま。」

二人はニツコリと笑みを交わした。すぐに恵美が頬を染める。

恵美は別に女性を恋愛対象にする少女では無いが、弥也子に対しては一方ならぬ傾倒を示した。

「資料館に行くのですか？一緒にしても良いですか？」

「ええ。お誘いしよかったの。」

恵美の話し方は敬語が苦手な彼女らしい丁寧語だ。それでも弥也

子に対しては懸命に敬語を交えようとする。

弥也子は微笑ましく恵美を見つめた。

「この前、弥也子さまに教えて戴いたクッキーを焼いてみたんです。召し上がってくださいますか？」

「あら、楽しみですわね。今度は消し炭にせずに済みまして？」

「まあ非道い。そんなの一回だけですもの。」

揶揄する眸が悪戯っぽく煌めけば、それにさえ見惚れて恵美の反論には力が籠らない。

頬を染めて弥也子を見つめる様は羞恥を含み、可憐な少女でしか無かった。

「では例の方も、今度は消し炭を口に詰め込まれずに済んで倅いでしたわね。」

「いやだ。弥也子さまったら。」

いや、倅いと思う普通の感性の持ち主ならば、恵美を主とは仰ぐまい。

弥也子は思い至り、訂正した。

「いえ、寧ろそれが不幸でいらっしゃるのかしら？」

「……………弥也子さま。」

呟いた弥也子に、恵美は複雑そうに呼び掛けた。

「奴隷に敬語など不要です。弥也子さま。あの方なんて呼ぶ必要も無いですよ。」

「他家の使用人には、ある程度の敬意を示すものでしてよ？恵美さま。」

それはその家への敬意となる。

恵美は笑った。

「アレは奴隷ですもの。」

13才の少女の云う台詞では無かった。

何故か同類と見做されているが、断じてその嗜好を持たない弥也子は、そつと嘆息した。

「奴隷の存在など認めませんわ。」

恵美は可愛い友人だが、その趣味嗜好に共感する事は一生無いと弥也子は思っている。

資料館の主 失恋と理解者2

司書室に印が無いのを確かめて、弥也子は扉を叩こうとした。

「弥也子さまあ！」

叩く前に扉は開き、いつもポーカーフェイスに微笑む少女が弥也子に抱き付いた。

「まあ、涼子さま。」

弥也子は何を云うよりも先に、恵美が心配そうな声を上げ、涼子を引き離した。

「どうなさったんですの？」

弥也子は生温い眼差しで恵美を見守った。

妬くのね。涼子さまにも。

こんな時だけはキチンとした言葉を遣える友人が、弥也子には不思議でならない。

鍵をかけて、何故こんなに立派な応接セットが司書室にあるのか首を傾げるソファ―に恵美と涼子が並んで座る。

勝手知ったる司書室の簡易キッチンで、弥也子は紅茶を淹れた。家事は弥也子が覚えるべき仕事では無いが、ケーキやクッキーなどのお菓子だけは作れる。

同じく、お茶も完璧な美味しさで淹れる。

これは淑女としての趣味に相応しいから、殆ど義務として覚えた事だった。

お茶の葉を蒸らす間にカップを温め、恵美が持参したクッキーも皿に盛った。

ご飯も炊けない娘とは思えない手際である。

料理までは手を出さなかったが、弥也子はその気になれば完璧なディナーさえ作れる様になるだろう。

しかし弥也子はその必要を認めず、簡単な朝食すら作った事は無い。

お菓子作りもある程度のレパートリーを身に付けた後は、気紛れに復習を思い立った時以外で、キッチンに立つことは無かった。

必要になれば作れない事も無いだろうが、そんな必要があるとも思わないから、興味すら抱かない弥也子である。

美味しいお茶を淹れるのは嗜みと考える故に、完璧に熟す弥也子であるから、女性らしい趣味に「必要」以外で興味を持つ事は無かった。

お茶を飲んで、落ち着いた涼子は語った。

曰く、恋をしている。

曰く、年上の男性で。

曰く、彼には恋人が居る。

「つまり失恋なさったのね？」

弥也子はあるさと告げ、涼子はまた泣いた。

恵美が涼子の肩を抱いて慰めた。

「もう良い。誰でも良い。今日迎えに来た人とホテルでも何でも行つてやる！」

「何故いきなりホテル？その前に婚約じゃないの？」

恵美が微妙な常識発言をした。

弥也子も一応は同意見だった。しかし恵美の奔放さを、処女なら許されると云うものではないと思う弥也子は、その彼女と意見を同じくする事に抵抗を感じた。

「……………」

故に弥也子は、無言でカップを傾けた。

「何を云うの！？試さないと怖いじゃない！！」

「……………試すって。」

「変態だったらどうするのよ！？」

恵美と弥也子は顔を見合わせた。

そう云えば、涼子の元に相談に来る女性達の配偶者は、特殊な性癖持ちが多い。

年齢的な問題で、滅多に社交の場に身を置く事は無いが、少ない機会でも逃さず観察していた二人である。

恵美はその本能で、弥也子は努力と才能で、その性癖を見抜いた相手は少くない。

「そもそも処女の癖に、何でそんな恋愛相談受けてるの？」

「恵美さま……。同感ではございますけど。」

もはや言葉を取り繕わない恵美に、弥也子はため息を零した。

「恵美さま！」

「うん？」

「弥也子さま！」

「はい。」

感極まった様子で、涼子は叫んだ。

「嬉しい！！！」

失恋を忘れ、涼子はサメザメと嬉し泣きした。

恋愛相談室と呼ばれ、様々なセックス相談を持ち込まれ、経験豊富と云われ続けた涼子は嬉しかった。

「私が処女だって信じて下さるのね！？」

信じた訳ではない。

二人の少女は、ただ知っているだけだった。

涼子は別に、いつも「あんな」に愉快な人間では無い。

今後、更に親しくなつてからも、あそこまで壊れた涼子を二人が観る事は二度と無かった。

翌日、涼子は珍しく授業に出て来た。

が、弥也子と恵美を呼びに来ただけらしく、二人が揃えばすぐに教室を後にした。

「誰かに言付けて下されば宜しかったのに。」

三時限目に登校した弥也子が恐縮して見せれば、涼子はどうでもないと首を振った。

「私の都合で呼び立てするのですもの。そんな無礼な事は出来ませんわ。」

後にその無礼な事をする涼子も、この時は殊勝だった。

そして、後にも先にも無い程の、己が無様な真似を涼子は詫びた。

「みつともない姿をお見せしまして。」

羞恥に俯き、涼子は云った。

「忘れて下されば倖いなのですけど。」

弥也子は微笑した。

潔く謝罪出来る人間を弥也子は好ましいと思う。

恵美は恵美で涼子が好きだから、と深く考えずに頷いた。

「涼子さまが云うなら。」

「私は誰にも申しませんし、恵美さまはすぐに忘れてしまわれますわ。」

弥也子の言葉に引つ掛かりつつも、恵美は頷いた。

「うん？」

「……………。有難うございます。」

まさか本当に忘れるとは思わず、涼子は頭を下げたものだった。

序奏 優しい畏の気配

「今日こそ告白をするわ。」

「そう。」

「頑張って！涼子さま！」

司書室で、いつもの様にお茶を飲み乍ら、涼子は拳を握り、恵美は声援を送った。

弥也子はおつとりと、二人を見守る様に微笑んでいた。

「せっかくの機会ですもの。有効に使って見せますわ。」

「二人きりになる機会は有るんですか？」

「ええ。一定以上の作業は私達にしか出来ませんから。」

「カッコいいです。涼子さま。」

二人が盛り上がるのを、弥也子は時折相槌をうつくらいで、殆ど笑顔で眺めるだけだった。

しかし涼子が出掛けた後、最初に動いたのは弥也子だった。

ヶ峰の男子部とも呼ばれる、兄弟校の春ヶ峰に向かったのはどうでも良い話だ。

一本の通話を終えた弥也子に、恵美は問い掛けた。
親しみを込めた口調と笑顔に、少し嫉妬したのだ。

「弥也子さま……その人が好きなの？」

「ええ。けれど友人としてなら、もっと好きな人は居るわ。」

「誰？」

「そうねえ。朝丘さまとか。」

「……………」

自分の名前を云って欲しかった恵美は少し落ち込んだ。

「何さ。あんな親父。」

「そんな年では無いでしょう？それに岬さんの親友でしてよ？」

弥也子は呆れた。

10才も離れてはいない。

岬は涼子が告白を決意した相手であり、朝丘とは高校生時代からの親友で、同期生だ。

恵美は弥也子の窘める眼差しから視線を逸らし、先程涼子が出て行った司書室の扉を見つめた。

そうするとある種の感慨が湧く。

「可哀想な涼子さま。」

恵美はため息をついた。

弥也子は首を傾げた。

「涼子さまとも有ろう人が、何故落とせない殿方などに構いつけるのかしらねえ。」

二人から見れば、涼子の失恋は確定事項だった。

「でも、涼子さまも今度は自棄になどならないかも知れないよね。」
「それならそれで構いませんわ。別に確約も致しませんでしたし。」

二人は涼子の失恋後の自暴自棄を心配していた。

「でも、やっぱり自棄になわよね。きっと同じ事をするよね。」
「そうね。同じ事をなさるでしょうね。」

それも。

もちろん織り込み済みの二人だった。

「倅せになってくれるかしら。」

「私の人選に間違いが有ると思います？」

弥也子はニツコリと天使の様に微笑った。

「丁度良い機会でしたわね。」

恵美はうつとりと自信に満ちた天使を見つめて頷いた。

弥也子さまに任せれば間違いないものね。

恵美はそう思ったが、恐らく涼子はそうは考えないだろう事くらいは気付いていた。

だから、今の事は二人の秘密だった。

恵美は弥也子との秘密が増えて、ちょっぴり倅せだった。

1話 共通する立場

美晴ヶ峰女学園。

兄妹校に春ヶ峰学園と云う男子校が有る。

3つの山を学園が占有している所も、幼等部から大学部までの一貫教育を誇る所も、自由と自立を掲げた校風まで、まるで二卵性のよく似た双子の様な学園である。

もうひとつ風ヶ泉学院と云う姉妹校が有るが、こちらは共学で、双子たちとは偏差値が高い以外に相似性は見出だせない。

とは云え、ここでは関係無い話だ。

ヶ峰の双子にはもうひとつの共通項が有る。いや、共通する名物と呼ばれるに足る人物が居る。

居た。と云うのが正確かも知れない。

男子校でのその人は、既に大学部まで卒業した社会人である。

しかし、大きな古書店の後を継ぐ彼は、未だに学園の資料館に度々通う。

司書のバイトも兼ねて居るから、下手をしたら自由登校が認められた、成績優秀だが余り登校をしない生徒より通っている。

彼は在学中から穏和な人柄で知られ、様々な相談を寄せられる人格者だ。

その言葉を聞き傍に居るだけで、人は癒される気持ちになる。

そんな優しい雰囲気や常を纏う彼は、皆に慕われた。いや、現在進行形で、今の生徒達にも慕われている。

どんな悩みだろうと、彼に相談して心が晴れない人間は居ない。等と、有り得ない噂まで真しやかに囁かれる始末である。

そしてそれは、ある意味では事実でしかない。

所詮は坊っちゃん校に通う年若い少年達の悩みなど、高が知れて
いる。

年頃である事も手伝って、その殆どは恋愛相談だった。

そして、稀にある本当に深刻な悩みを抱える者さえ、確かに彼の
傍に立てば解決はしないまでも癒されるのだ。

彼は押し付けはしないが、惑い悩む人が居れば、常に手を差し延
べる。

誰が呼び初めたか、在学時から彼は呼ばれた。

その手に掛かれれば魔法の様に癒される。故に「マジシャン」と、
敬意をもって呼ばれるのだ。

穏やかに優しく微笑む彼に、人は総てを打ち明けられる聖者を連
想する。

聖人の如く崇め、悩みを打ち明け懺悔する。

司書よりも聖職者が似合う人物だった。

そして、彼は周囲の期待に敢えて背く気も無く、優しい魔法使い
《マジシャン》の役を熟した。^{こな}

彼が多少なりとも我を見せるのは、恋人が親友の前くらいだろう。

女子校でのその人は、一見大人しやかな令嬢だが、淡々とした物
云いや冷めた眼差しが他人との間に一線を引いて踏み込ませない。
だが終始穏やかな笑みを浮かべる彼女は、それを悟らせもしな
かった。

ほんの少し近寄り難い印象に、だから相談者達は誤解する。

彼女は自分たちを救ってくれる人で、救われる立場の人間では無いから踏み込む事も出来ない相手だと認識する。

彼女は自ら招く真似はしない。

しかし訪れる者を撥ね付ける事も無く、ただ内心を窺わせない淡い笑みを浮かべて人の悩みを聞いた。

美晴ヶ峰は良妻養成学校とさえ揶揄される、お嬢さん学校だ。

特に比較的自由になり、一人でも学園外に出られる様になる大学部に進む前に、結婚する生徒が大多数だった。

そんな女子校の生徒の悩みは、結婚への恐れ、結婚生活の悩みが大部分を占めた。

いや。それしか無いと云っても過言では無かった。

彼女には婚約者も居ないのに、恋人の一人さえ居たことも無いのに、恋愛相談と呼ぶにはデイープ過ぎる相談ばかりが舞い込んだ。

彼女が何を否定しても、周囲は信じたい事しか信じない。

じきに彼女は諦めて、口元に微かな笑みを浮かべたまま内心を晒さなくなった。

不思議なアルカイツク・スマイルは、時に相談者を熱狂的な信者にさえした。

彼女がポーカーフェイスを崩して本音を語るのは、親友である少女二人の前のみである。

勿論、二人共聖人でも聖職者でも無い。そんな者と比べるなら俗物でしか無い。

だから、彼等は互いに親近感を抱いた。自分が聖人では無い故に、相手の苦勞も理解した。

ただ。

二人の立場が似て非なるモノだとは、二人共に理解しては居なかった。

ヶ峰の名物。その共通項は、資料館の主と呼ばれる二人が、共にもうひとつ、同じ呼び名を冠する事だった。

いつしか資料館の主は「恋愛相談室」の別名になっていた。

2話 共通する立場2

高等部が上がってから利用できる丘の上の資料館を、中等部から出入りする事を黙認された生徒は少ない。

たまたま二人の周囲に集中してはいるから、かなりの例外だと云う実感は薄い。

そして資料館の主とまで呼ばれる程、二人共にそこに籠りきりだった。

訪ねて来るのは、一部の親しい友人と、不特定多数の悩める子羊達だ。

司書室は「お悩み相談」の窓口と化していた。

通称「恋愛相談室」。看板を出している訳でも無いのに、いつしか「資料館の主」の別名が決まっていた。

今日も訪ね来た悩める子羊が、晴れやかな笑顔を取り戻して帰って行った。

「^{アチラ}彼方は知らないけれど。」

と彼女は思う。

いつも、思ってしまう。

彼が恋愛相談室をするから、同じ資料館の主である涼子も恋愛相談室になった。

その諸悪を、涼子はしかし憎む事も出来ない。

アチラとは町二つ離れた男子部の資料館の責任者である。

未だ大学部の頃から、彼は卒業したら司書と成る事が決まっていた。

丁度、涼子が初めての失恋をしたその頃、二人は親しく会話を交わす様になっていた。

将来が資料館の司書だなどと、坊っちゃん学校に通っている癖に家の事は良いのだろうかと疑問に思った。

当然、同じ疑問を抱く者は多い。しかし彼を目の前にしてその笑顔を視界に映せば、そんな事はどうでも良くなってしまふ者が多数を占める。

涼子はそう云う意味では少数派だった。

その笑みは、白い魔法使いだのマジシャンだのと呼ばれるに至った理由を、納得させるに充分なものだった。

穏やかで綺麗で優しい男性だと思った。

失恋したてのヤサグレタ心を癒されもした。

しかし、それはそれ。これはこれ。

涼子は疑問を疑問のまま置いておくには堪え性が不足していた。

13才の無邪気さを前面に押し出して訊ねた。

「お家は継がなくて宜しいの？」

涼子の修復の腕は悪くない。それどころか、どちらのヶ峰にも岬以外に涼子より丁寧な修復がこなせる者は居ない。

ヶ峰の良いところは、学びたい事柄ならば差別なく機会が与えられる事だ。

一般のテストで上位に有りさえすれば、大概の我が儘はきく。

涼子は資料館に籠る為に、そして好きなだけ本を触る為に、きちんと好きでもない科目も勉強した。

天才肌だと思われるのは知っているが、完璧な誤解だった。

専門的な修復の技術を学びたいと云う希望は、寧ろ学園の有るべき姿だと歓迎された。いや推奨していた。

成績上位者に与えられる過ぎた自由は、よりよく学ぶ為のものだった。

本来の目的で利用し、教師を求めた涼子は教師達の覚えが大変に良い。

それは岬も同様で、涼子は自分が修復しかねるものが有れば、岬を訪ねて依頼する。

この日もそうして、訪ねたついでに質問したのだ。

岬は虚を衝かれた様で眸を瞬いた。

岬は幼い頃から「特別」扱いされてきたから、そんな風にズバリと踏み込まれる事は珍しかった。

それこそ親友からの遠慮の無い扱いが「特殊」に感じる程だったが、岬自身がそれを望む訳でも無く、寧ろ聖人扱いには苦笑するばかりだったから、涼子の態度や言葉を不快に感じる事も無かった。

故に驚いた様に瞬いたのも須臾の間に過ぎず、すぐにフワリと柔らかに微笑んだ。

その微笑みの前では全てが赦される気がする、何でも打ち明け懺悔したくなる。

その評判通りの微笑と優しい眼差しに、当時の涼子は肩を竦めた。

天使も聖人も居る訳が無い。だからその手の笑みは、何かしらの誤魔化しの様に感じてしまったのだ。

「答えたく無い事でしたら、何も仰有る必要はございませんわ。」

先手を取ったつもりが、さらりと躲かれた。

「いや。特に秘密でも無いですよ。誰にも聞かれなかっただけで。」
「そうでしょうね。」

この綺麗な顔を見ていたら、何もかもがどうしても良くなりそうではあった。

子供相手でも、女性に対する丁寧な言葉を遣い、紳士的な態度を崩さない。

普通の人達は……特にそれが女性ならば、何かしら疑問を抱いても、その笑みがそこに在るだけで忘れてしまえるのだろう。

涼子はそう思ったが、涼子自身は決してそんな風にはならなかった。

だから珍しく岬の家庭事情を知る、親しい友人の一人に成った。

岬には弟が居て、家業はその弟が継ぐ事。両親は幼い頃に亡くなった事。

後見役の叔母夫婦が、兄弟を引き取った事。

弟は叔父に懐き、家業に興味を覚えたが、自分は叔母が道楽で経営している古書店に魅せられたのだと。

そんな話を聞いて、涼子はウンウンと頷いた。

涼子は岬を友人として好きで、それは岬も同様だった。

まだ中学生の歳の離れた少女は、その年齢にしては驚く程に読書の幅が広がった。

最初は本の話をして親しくなり、小さな読書友達が、やはり驚く程に大人びていると知った。

この年頃の子供は、ちゃんと会話が出来ない事も多い。それ以前に、岬を「特別」扱いせずマトモな会話が出来るのが、それこそ特別だったのだ。

だから、岬にとってこそ、涼子は貴重な友人の一人だったのだ。

その関係は、中学生と大学生が、高校生と社会人に成った現在も、ずっと変わらないまま続いている。

少なくとも、岬はそう考えている筈だった。

いつの間にか、涼子は岬に恋をしていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5074ba/>

秘密の花園～美晴ヶ峰のお嬢様シリーズ島津涼子～

2012年1月14日20時52分発行